

## 内田魯庵研究(六)

### 魯庵にとつての紅葉

はじめに

魯庵の紅葉作品評や『文學者となる法』には、他の作家に対するのとは一線を画した辛辣な批判が含まれている。批評方法や表現、取り上げる事柄の端々に徹底した批判精神が顔を出している。勿論これらは紅葉の作品や文學観に対する否定を意味するのであろう。が、何故ここまで辛辣でなければならなかったのか。そこには逆に紅葉に対する特別の意識が働いていたのではなからうか。本稿は、この素朴な疑問に発している。魯庵と紅葉の関係が単なる批評家と作家という図式で割りきれられるものかどうか、辛辣な批判の裏面にあった魯庵の意識を探りながら、魯庵にとつての紅葉とはどのような存在であったかを捉えていきたいと思う。<sup>注1</sup>

### 木村有美子

翌月の後を継いで「女學雜誌」の批評欄を担当するようになった魯庵は、精力的に文芸批評活動を展開していく。特に、明治20年代の前半には、同時代の作家に関するだけで五十六篇の作品評を行っている。最近刊行された『内田魯庵全集』の第1巻<sup>注2</sup>は、魯庵の「文芸評論集」とも呼べる内容を持つが、その大部分が20年代前半に集中的に発表されているのを見ても納得がいこう。

この五十六篇中、最も多く取り上げられている作家は他ならぬ紅葉であり、「二人援助」「鬼桃太郎」といった幼年文学を含めれば、全部で十二篇にも及んでいる。五十六篇中の十二篇であるから、一作家の占める割合としては、かなりのウエイトである。これから見

ても、魯庵が紅葉に関して、特別な関心を抱いていたことが推測できる。<sup>注4</sup>

また、内容的に見ても、紅葉に関する批評には他に見られない特殊性がある。

以前拙稿<sup>注5</sup>で指摘したことがあるが、魯庵は文芸批評を行うに際して確固たる評価基準を持っていた。かなり逍遙の『小説神髓』の影響をうけていたと考えられるが、「人物」「キャラクター」の追求、「脚色」の一貫性を小説の第一義とし、表現技術はそれに次ぐものであると捉えていたのである。従って、批評のキイポイントとなる視点も多少のばらつきは見られるが自ら絞られ、批評方法そのものも一定の傾向を示している。

さて、本稿で問題にするのは、このような魯庵本来の批評方法を採らない特殊な批評であるが、『内田魯庵全集』第一巻に収められている作品評を通巻しても、次に挙げる、ごく少数の例があるばかりである。しかも注意すべきは、それらの殆どが、何らかの形で紅葉に関わっているという点である。

例えば、「紅葉山人の『拈華微笑』」<sup>注7</sup>は、作品評という体裁をとりながら、英国の「ユーモア」と「日本の滑稽」との相違を論じた魯庵の「ユーモア論」と呼ぶにふさわしい内容を持っている。「拈華微笑」の「ユーモア」は、魯庵の論を展開するための導入として用いられているにすぎないのである。

また「紅葉山人の『色懺悔』」<sup>注8</sup>は、二度に亘って連載されたが、（其一）に於て魯庵は紅葉の『夏木立』<sup>注9</sup>評の方法をそっくり借用してみせている。表紙、扉、挿絵と順に批評していくところ、表現の細部にはかり囚われているところ、あるいは（二）の中に戯文調の言葉を挟むところなど、紅葉の批評方法のパロディであることは一目瞭然である。<sup>注5</sup>

更に、魯庵は、この紅葉の批評方法を「乙女心」<sup>注10</sup>評の前半でも借用している。思案は「乙女心」の冒頭に、紅葉の『色懺悔』の「作者曰」をもじったものを掲げたが、魯庵はこれに対して「何のわけもなく」模倣するのは「猿真似」ではないか、と批判しているのである。ここで紅葉の批評方法を借用したのは、諷刺という意図をもってこそ、パロディは意味があるのだということを示したかったに違いない。魯庵は紅葉風に真を追って順々に細部を云々した後でこのように述べている。「小瑕瑾はコンナもの」だ……。つまり、紅葉の批評方法では、取るに足らない「小瑕瑾」しか問題に出来ないのだと言っているのである。魯庵は次に「大瑕瑾」として「人情に深からざる事」と「微の生へた趣向」の二点を挙げ、本来の自分の方法で批評を続けているのである。

この批評は二つの意味で面白い発見をさせてくれる。一つは「諷する」意図を持たないパロディは「猿真似」ではない、という魯庵のパロディ観が出ていることであり、もう一つは、思案の作品評を行いながら、紅葉の批評方法を痛烈に批判しているということである。

「眞美人を評す」<sup>注11</sup>に於ても、「色懺悔」評の（其一）と同様の、主に表現面に関する細々とした批評が続いている。「眞美人」は硯友社員であった麻溪居士の作品であるが、批評の末段に至って魯庵は「末筆ながら硯友社の紅葉殿にも申さん」と批判すべき対象が紅葉であることを明示している。そして、以下の批評は紅葉の「社員麻溪居士著眞美人の評判」<sup>注12</sup>のパロディで綴られているのである。少々長くなるが対応する部分を引用してみる。まず、紅葉文であるが、

末筆ながら民友社の五郎殿にも申さん  
趣向が淡白なりとも規模が狭小なりとも面白い物語のないではあるまい 又我々は蟻の類ならねば箱庭に杖を引くに面白からず小さい處が上野か向嶋ならでは心も目も樂しまするに足らずとおつしやつた五郎の君は箱庭に箱庭の奇觀あるをしりたまはざるか羊羹の古折に土を盛り苔を載せ鶴は旅人よりも高く幽谷の間に鉛の天神様を安置したるのみが箱庭と心得られしよな笑止々々 かくは申すもの、眞美人が奇觀を備へたる玉階朱簾の下に据ゑ置く可き箱庭なりといふにはあらず  
マア話がそんな物かと存する  
とある。これに対して魯庵は、

末筆ながら硯友社の紅葉殿にも申さん、余は五郎氏の親戚でも何でもなければ氏に代りて御返辭申すべし余は元より蠅にあらざれば箱庭に杖を引きし事もなく箱庭の奇觀を見物せし事もなければまさか羊羹の古折に土を盛り苔を載せ鶴は旅人よりも高く幽谷の間に鉛の天神様を安置したるのみを箱

庭とは心得ずシカシどんなに工夫を凝すとも箱庭は箱庭なり畢竟お坊さんお嬢ツチャマのお慰にして雅人文客の樂むべきものにあらざ（中略）紅葉の君は箱庭の奇觀を知り給へば是を以て上野向島の自然景と云ふべしと思ひ給ふよな笑止々々 かくは申すもの、眞美人は玉階朱簾の下に据ゑ置きて金衣公子に愛玩せらるゝ箱庭なる事疑ふまでもなければマア話がそんなものかと存する  
と反論しているのである。

また「眞美人」中に……が頻繁に用いられていることに關しても眞美人の著者はチト濫用せしか如し試に例を擧ぐれば四十七頁に「前に述……た」（中略）とあるの如き最も甚しと云ふべし 硯友社員が……好きの深き御様子其内御説明に相成るとの事か……申す評者喜悅此上なく候。  
と述べているが、これは紅葉が「社員麻溪居士著眞美人の評判」の中で……の使用について「これには深い様子のある事其内説明仕る御座らう」と記したことをふまえているのである。麻溪居士の……の濫用の理由を紅葉の説明に待つとして注意すべきだろう。

つまり魯庵は「眞美人を評す」と題しながら、実は麻溪居士の後に居る紅葉をこそ批判しようとしたのである。魯庵はこの批評を「西の諺に『我子を慢る親は大馬鹿』とありチトたしなみめされ」と締め括ったが、硯友社員に対する紅葉の甘い評価を直接攻撃したものと見える。批評の前半が、紅葉の批評法を踏襲した細かな表現

上の指摘に終始したのも、こうした事情に拠るものであろう。

その他に魯庵本来の方法を採らない批評として「『お八重』の評拾遺」<sup>注13</sup>が挙げられる。この批評は、

兄弟分の藤之屋が大ざつぱりに評して小瑕瑾は曰はずト容體振て筆を止められたが我れは承服か出来かねる。著者は餘人ならぬ忍月居士、小瑕瑾とてやはか見遁すを得べき。遠慮會釋なく申さうぞ、聞しめされ忍月居士。

で始められ、終始一貫して紅葉風の批評方法によって表現面の不適當のみが指摘されているのである。まさしく「小瑕瑾」の羅列であるが、先の引用からもわかるように、「藤之屋主」の署名で魯庵が行った「忍月居士の『お八重』」<sup>注14</sup>の統篇とも言うべき趣きを持っている。その上、「兄弟分の藤之屋」とは全く別人が批評するといふ体裁をとる複雑な構成になっている。そのため、内容的には「忍月居士の『お八重』」とは重ならない。「小瑕瑾」の指摘に留まっているし、方法的には、別人によると思わせるためか、全く魯庵本来の方法とは違っている。が、その意図は、当時批評家として魯庵と並び称されていた――つまりライバルの忍月の作品を思う存分批評してみたい、というところにあったのであろう。そのため、本来の方法で「小瑕瑾」を先に述べ、更に平素は黙殺する細々とした「小瑕瑾」を指摘するという、複雑な二段構えを用いたと見られる。と考えると、「『お八重』の評拾遺」は独立した批評として扱おうより、「忍月居士の『お八重』」の統篇として、二篇一体で捉えた方がより魯庵の意図に副うであらう。確かに「『お八重』の評拾遺」一

篇は特殊な方法による批評である。が、先に例示した批評とは同一に論じられない事情を含んでいるのである。

このように、特別な事情のある「『お八重』の評拾遺」を除けば、魯庵は紅葉に対してのみ、他作家には見られない特殊な方法による批評を行っていると言える。特に、「色懺悔」評の（其一）や「乙女心」評、「眞美人」評で行った紅葉の批評方法のパロディは、他の文芸批評では決して見られないものである。魯庵は「天井の隅の蜘蛛の巢を拂ふが如く徒らに字句の末に拘泥し全豹を執て是を論じない紅葉の批評のあり方を苦々しく思っていたが、あえてそれを借用した。その意図したところは言うまでもなく紅葉に対する諷刺であつたらう。作品と同様の弊に陥っている彼の批評方法を用いて作品を批評することで、より効果的に、紅葉の弱点を指摘しようとしたのである。これは前稿<sup>注5</sup>において述べたとおりである。」「<sup>（二）</sup>が、視点を巡らして、紅葉のみにこうした方法が用いられている、その理由をこそ、もっと追求する必要があるのではないかと思う。取り上げる作家の方法をパロディ化することが、一層辛辣な批評を生み出すのであれば、他作家の作品に対しても用いられて当然であらう。何故魯庵は紅葉にだけパロディという特殊な方法を用いたのか。

まず考えられるのは、方法をパロディ化できるほど、魯庵が平素から紅葉をよく研究、分析していたということである。

勝本清一郎氏は「座談会近代日本文学史」（第七回）<sup>注15</sup>の中で、魯庵が所有していた「我樂多文庫」には、「ことこまかく朱評」が書

き込まれていた、と述べているし、魯庵自身、後年の回想記『思ひ出す人々』に、<sup>注16</sup>「我樂多文庫」の第一號が創刊されたのを早速買つて來」て、「巻頭の辭から廣告社告の末までも一字も餘さず讀んだと記している。魯庵が紅葉の著作を、幼年文学に至るまで取り上げて批評したのも、こうした紅葉に対する関心、研究心の顕われであつたと言えよう。

第二に考えられるのは、パロディによる批評を紅葉ならば許容してくれるに違いない、といった意識を、魯庵がどこかに抱いていたのではないか、という点である。

前述したとおり、魯庵は「我樂多文庫」の公刊第1号から「一字も餘さず」熟読しているわけであるが、第1号の「硯友社々則」や第13〜16号に連載された「紅子戯語」、そして狂句等に現われた紅葉の駄洒落やパロディのセンスをどう受けとめていたか、考える必要がある。

『思ひ出す人々』の中で、魯庵は、駄洒落やパロディに満ち溢れていた初期の「我樂多文庫」に、「若々しい生氣」や「放縱な駄々ツ子氣分」を感じ、それを肯定する発言をしているし、「紅子戯語」についても、

當時の硯友社の生活が活けるが如くに描かれ幹部八人の風手が紙上に躍り出してゐる。若き紅葉の技倆を見るべき傑作の一つである（以下略）

と大いに評価しているのである。つまり、紅葉が「我樂多文庫」誌上に示した駄洒落、パロディに、魯庵は共通の感覚をもつ同世代の

若者として面白みを感じているのである。これは、文学に何を求めるか、といったレベルの問題ではなく感受性の問題である。この魯庵の志向はスウィフトやアディソンの諷諧を評価していたところからも窺うことができる。紅葉のセンスが魯庵に通じたように、魯庵のパロディによる批評も紅葉に受け入れられるであろうといった、共鳴、親近感の発露が紅葉に対してのみ特殊な方法を用いさせた、<sup>注17</sup>といつても強ち不自然ではあるまい。尚、本稿では詳しく取り上げないが、『拈華微笑』評に見られる魯庵のユーモア論の展開も、紅葉作品が持つユーモアに共有の意識を抱いたためとも受けとれるのである。

しかしながら、いくら紅葉の著作を精読、研究したとしても、あるいは、そのセンスに共鳴するところがあつたとしても、それだけでは実際に紅葉の特色をふまえた文章のパロディ化は無理であろう。そこにはやはり、文章を綴るに關して、両者の間に共通した素養がなければなるまい。とすると、第三にあげるべきは、素養の共通性ということになるうか。

そこで少々横道にそれるが、幼年時から明治20年代前半頃までの両者の、文学に關する素養の養い方を簡単にみてみたい。

まず、漢文学についてであるが、紅葉は14歳で岡鹿門の漢学塾に入り、15歳の時には石川鴻斎について漢詩文を学んでいる。「顯才新詩」に漢詩を投稿したのもこの頃である。翌年には、九華、香縁らの文友会に参加、漢詩文の回覧誌の同人となっている。山田美妙は「紅葉子追憶の記」に<sup>注17</sup>

士 此頃（筆者注 明治18年頃）の紅葉子は狂歌第一、発句第二、  
凡そ此割り合ひで擬つて居た。

但し、漢詩に於てはその以上であった。  
と述べているが、紅葉が漢詩に深い関心を寄せていたことがわかる。

一方、魯庵は、小学校入学以前から父に「論語」「大学」の素読を授かり、自ら「唐詩選」「文選」に親しみ、小学校では課外で「史記」の講義を受けている。回想中にも「漢籍の本も大分讀みました」とある。

次に外国文学について見てみよう。紅葉が早くから外国文学に通じていたことは、岡保生、片岡良一、富田仁の諸氏が指摘しているとおりである。<sup>注91</sup>このことは明治22年4月に発表された「やまと昭君」が既に「アラビアンナイト」の翻案であったという一事を見ても容易に推測できよう。思案の追憶によると、紅葉の酒席での十八番が「私の好きなのは世界に二人井原西鶴シエキスピヤ」という唄だったというが、シエルクスピアだけでなくサッカレーにも早くから言及しているのである。

魯庵が「外國本に手を出し始めた」のは、回想によると「十六歳ぐらゐの時」であったという。『ガリバー漂流記』を手始めに、リットン、ディズレーリー等の著作に親しんだようである。同じ回想中に魯庵は、

その當時（筆者注 16〜17歳位の時）は外國語が出来る人とても甚だ怪しいもので、無論自分一人では意味などの瞭きり

と取れないところなどもあったので、その頃私の知つて居た或る外國人と一緒に讀んで、愉快で堪らなかつたものだ。

と書いているが、「或る外國人」というのは、恐らく築地居留地で教会活動を通じて知つた宣教師フルベッキ氏あたりを指すのであろう。魯庵はこのように外國人と的交流を通して活きた語学力を身につけた。そして遠縁にあたる井上勤の翻訳助手をすること<sup>注21</sup>で外國

文学を讀解していく基礎力を養つたのであった。野村喬氏によると、「ディケンズ、サッカレー」から出発した魯庵は、明治20年頃

には「アディソン、スチール、Sジョンソン、また詩人ゴールドスミスからデフォーやスウィフト」に関心を持ち、英訳の「ユゴー、モーパッサン、ゾラ」も「読書範圍」にあつたという。<sup>注22</sup>

因みに、明治22年4月「國民之友」に掲載された「書目十種」に魯庵は、

ツルゲーネフのあひびき及めぐりあひ、

Deserted Village, and Traveller. Spectator (Addison).

Jonson's Lives of Poets. Dickens' Works

等の外國文学を挙げている。

また、魯庵は『思ひ出す人々』の中で、紅葉が門下生に対して外國小説よりも「創作家に必要なるは實世間の觀察」であると説きながら、自身は「常に外國小説を讀んで頭を肥やしてゐた」と述べているが、後に様々な翻案小説を著す素養は、20年代の初期の段階で紅葉の中に育まれていたのである。同様に魯庵が『罪と罰』をはじめとする種々の訳出を行う基礎も、既にこの時期に培われていたと

言えるだろう。

以上述べたように、具体的に取上げた作品には隔たりがあるかもしれないが、早くから関心を持って漢詩文や外国文学に親しんで来た点で両者は共通している。が、紅葉や魯庵が好んで著作の中に取り入れ、パロディ化したのは我国の文学、特に近世文学なのである。

紅葉が早くから近世文学に親しんでいたことは、16歳の時筆写した「春色連理棗」五冊が現存していることからわかるし、筆写本「我樂多文庫」に掲載した「江島土産滑稽貝屏風」や「儂紫怒氣鉢卷」等とその影響が歴然としている。明治18年から西鶴に接していたことも、紅葉の「自筆書留帳」からはっきりしているのである。<sup>注25</sup>

『明治文豪傳之内尾崎紅葉』には、「滑稽貝屏風」を執筆した頃の紅葉の愛読書が紹介されている。

此頃氏は有るの『鶴ごろも』、<sup>注24</sup>許六の『風俗文選』などを好み、小説としては京傳馬琴ものを斥け、西鶴、近松などを愛讀せり。此の他三馬、焉馬の戯文などを耽讀せり。就中西鶴は其私感する處にして、珍書を漁つては之れを手寫し、『一代男』『一代女』『五人娘』等皆寫本を藏せりき。

また、美妙の回想中にも、一九の「膝栗毛」を紅葉が絶贊していたとあり、紅葉が古典の中でも特に近世文学に心酔していたことが読み取れるのである。

魯庵が西鶴を知るのは寒月と知り会ってからで紅葉より遅れるが、西鶴以外の種清、春水、三馬、種彦、馬琴等、14〜15歳頃まで

にかなり広く読み漁ったようである。<sup>注22</sup>特に「八犬傳」は少年時代十三回も繰り返して読んだと回想している。<sup>注26</sup>それ以後、20年代前半まで何に親しんだかは資料不足で不明であるが、先に挙げた「書目十種」(明治22年4月)のうち、外国文学の他には、「徒然草、謡曲數種、近松門左衛門著作、京傳のしやれぼん、古文眞寶」を挙げており、近松、京伝の名が見えている。

一方、紅葉は、「太平記、枕草紙清少納言、風俗文選、娘節用人情本、鶴一代女、京傳作小紋雅話、唐床詩醇、鶴五人女、平家物語、俳風柳樽」を挙げています。西鶴の作品を二点含めていること、京伝の滑稽本、川柳の「柳樽」を加えていること等注意すべきである。

以上を総合して考えると、紅葉が最も心酔していたのは西鶴であり、三馬、一九、京伝の諷諧や川柳のおかしみを愛したと言えるだろう。魯庵の方は紅葉ほど例証が多くないが、「日本小説の三大家」<sup>注27</sup>として西鶴、京伝、三馬の名を挙げており、西鶴を知ってからは大いに彼を評価し、明治期の西鶴復権に尽力したところなど紅葉と似通っている。また、京伝、三馬の「諷誠」を重視した点も記憶すべきであろう。魯庵が近世文学に通じていた様子は種々の文芸批評、あるいは後の「文學者となる法」を見ても推測できるところである。

以上、長々と述べて来たが、素養の面で魯庵と紅葉とはかなり共通する部分を持っていると言える。特に近世文学に於て、西鶴や三馬、京伝を愛読、評価するあたり、重なる部分が多いのは注目すべ

きことではなかるうか。魯庵と紅葉との間に、こうした共通の素養があったからこそ、魯庵は紅葉の批評方法を巧みにパロディ化することができたのである。紅葉に対してパロディという特殊な批評方法をを用いた背景に、素養の共通性があったことは忘れてはならないであろう。

更につけ加えるなら、紅葉が慶応3年12月16日（太陽暦では1868年1月10日）、魯庵が慶応4年閏4月5日（太陽暦では1868年5月26日）の同年の生まれであり、江戸から明治への過渡期に江戸で生を受け、多感な少年時代を送った、という生育環境の一致も見逃してはならない点である。

また、明治22年に出会って以来、両者が親しく交際した様子は魯庵の回想からも窺えるし、文芸批評の端々にも現れている。例えば、『色懺悔』評では「紅葉子は三馬とデッケンスが好きと聞きしに（以下略）」、『南無阿彌陀佛』評では「山人は西鶴其碩を喜び常に誦讀すると聞く」、「此ぬし」評では「平生デッケンスを愛讀し又佛露の所謂實際派小説を玩味したる大人が（以下略）」というように、紅葉の平素の愛読書を挙げているのである。このようなところからも、両者の個人的な交流が推測できる。

こうした両者の交流が共通の素養の上に育まれて、より一層親近感を抱かせることになったと思われる。紅葉に対してのみ、特殊な批評方法を用いた一要因とも言えるだろう。

以上、紅葉に対してのみ、何故パロディという特殊な方法が用いられたのか、について考察して来た。もう一度纏めると、パロディ

の背景には、魯庵の紅葉への関心、研究心があり、また、パロディという方法を紅葉なら許容してくれるだろうという親近感・共鳴、そして、文章化するにあたっての共通した素養があったということである。魯庵にとって紅葉は単なる諷刺、批判の対象ではなかった。パロディによる強烈な諷刺の奥には、紅葉に対する特別な意識があったと言っていいたいだろう。

次に『文學者となる法』<sup>注31</sup>を取り上げてみよう。『文學者となる法』は、明治27年4月、魯庵が「三文字屋金平」の名に匿れて出版したものである。その諷刺の精神は『色懺悔』評（其一）の延長上にある。従来、文壇、特に硯友社批判の集大成と見做されて来た。野村喬氏は、この書が「いかにも文壇批判としての性格を持っている」点について、

なべてこれ、明治二十六年の文壇社会の裏面内幕に対するリポートならざるはなし。よくもこれほどの材料を蒐集できたものと呆れたくもなる。

と述べ、それを可能にしたのは「魯庵の群を抜く読書知識と、彼の広い交際や探訪」であったと記している。<sup>注32</sup>全くそのとおりであろう。この書の中で批判されていないのは、魯庵が尊敬してやまなかった、そして又自らも「文學者」であることを拒んだ二葉亭四迷、ただ一人であると言ってもいいほどである。

『文學者となる法』の内容の概略は、野村喬氏が各章ごとに纏めておられるので繰り返さないが、ここで問題にするのは、氏の言う「仔細に点検」すると頭われて来る「魯庵の文壇戯画」の部分である。野村氏はその一例として、愛山の「新婚生活と読書知識」、水蔭の「大家ぶりと半可通ぶつた書齋」、紅葉の「衣食住の模様と酷薄な人情」、蘇峰の「用語癖と硬派ぶり」、透谷の「御大層なインスピレーション」を挙げている。

が、これらが等しく、作家の私生活にまで及ぶ諷刺となっているわけではない。一見、愛山の「新婚生活」に対する揶揄など、私生活にまで踏み込んでいるように思われるが、あくまでも愛山が著した新婚旅行の記からの推測でしかないのである。同様のことは、巖本善治や宮崎湖處子の「Sweet home」にして述べた部分にも言える。野村氏が挙げた、蘇峰や透谷に対する諷刺も彼らの著作を読んだの把握であることは言うまでもなからう。

唯、水蔭や紅葉に関しては、書齋の装飾、衣服、食べ物の好みといった私生活がそのまま槍玉に挙げられている。他の作家が作品に反映した作風や人物を諷刺されるに止まっているのに、紅葉や硯友社一派に対しては、かなり私生活に踏み込んだ言及を行っているのである。

江見水蔭は、『文學者となる法』について、

文壇人全體に惡罵を浴びせて有つたが、別して硯友社に向つて激烈で有つた。主眼は其所に有つて、他は附けたりかとも疑はれた。

と述べているが、私生活に及ぶ諷刺が水蔭にこのような感想を抱かせたのではなからうか。

そうでなくても、当時文壇の中心的存在であつた硯友社は厳しく批判されている。例えば、

文學の定義或は文學の歴史などは一向無頓着にして如何有らうと關はず、隨て文學上の議論には少しも注意する事なくして一向平氣なるは局外にて迎も想像しかぬるほどの無頓着なり。と「文學者となり得る資格」の章にあるが、これは硯友社が全く「文學上の議論」に無関心であつた点を指摘しているのである。水蔭の回想中にも

硯友社は元來實行主義で、論議を甚だ好まなかつた。『傑作』を出せばソレで好いではないか。屁理窟を並べたつて、それが何に成る。』といふ紅葉の意見には、悉く社中が一致してゐた。とあり、魯庵の批判を裏付けている。

また、「交游に於ける文學者の心得」の章では、文學者としての交際は第一に小黨派を作るにあり。(中略)之が第一の秘訣なり。どうにか斯うにか連中が出來れば、此連中で茶番をする。酒を飲む、芝居に行く、花見に出掛ける、雜誌を發行する、一ツ新聞の寄書家となる、互に各々の著述を讚め合ふ——(中略)表面だけはぎつこばらんの無禮講を樹て、文壇に何派ありと氣焰を吐く。

と述べられている。硯友社一派が明治23年に黄鶴樓で茶番を行ったこと、26年に芳野に花見に出かけたことなど、水蔭や魯庵の回想の

中に記されているし、硯友社が「我樂多文庫」「文庫」をはじめとして「小文學」「江戸紫」「千葉万紅」「小櫻瓣」と各種の雑誌を發行したことは言うまでもない。紅葉が明治22年に読売新聞に入社して以来、硯友社員の作が紙上を賑したのは周知のとおりである。「互に各々の著述を讀め合ふ」というのも、前述の『眞美人』に対する紅葉の評価の甘さを見れば推測できる。名指しはしていないが、「小黨派」を組んで活動した硯友社を諷刺していることは明らかなのである。

その他、紅葉個人を攻撃した箇所も多々ある。「文學者として學ぶべき一般の見識及び嗜好竝に習癖」の章では、紅葉が「美術の趣味に富」んでいると言われながら「祥瑞レシヨクイ」と呼ばれる染付磁器を知らなかったことを挙げ、「今の文學者が美術心略は推想するに足る」と揶揄しているし、「著述に於ける心得拜に出版者待遇法」の章では、紅葉が「小説を書くに當り初めより趣向を立つるは甚だ拙也、(中略)書聯める中自づと趣向の出来るもの也」、或は「我が黨の志す處は詩の意を小説的に書くにあり」と語ったことに對して、

趣向を立てずして筆を採らんとするは到底出来ない相談に似た業、れども此出来ない相談を見事にやつてのけるが今の小説家の極めてエラキ所以也。

(前略)抑も詩の意を小説的に書くとは如何ある事を云ふや。更に百解千解萬々解するにあらざんば我々俗物其域に到達するを得ざるなり。

とその創作態度を諷刺している

また、スコットが生涯を通して「廿有餘」の著作しか残せなかったのに対し、紅葉が「僅か數年間に五十餘種」を著したことに對して、

紅葉先生が才と學は是等英國第一流の作家よりも十層倍大なるは勿論疑ひなけれど又以て我が作家社會のお手輕主義を知るに足るべし

と批判してもいるのである。

『文學者となる法』には、このような硯友社及び紅葉に対する批判は枚挙できないほど多く、右に挙げたのはほんの一例にすぎない。その上に、衣食住に至る私生活まで取り沙汰されている(例えば、『明治文豪傳之内尾崎紅葉』中の逸話が伝える紅葉の衣服の好みと、『文學者となる法』の「文學者のこしらへ」とを比べると、紅葉を揶揄したと思われる点が多く見出せる。)のであるから、魯庵が硯友社一派、特に紅葉から忌み嫌われたとしてもしかたあるまい。<sup>注35</sup>

『思い出す人々』の中に魯庵は、「紅葉と私とは二十七八年頃までは可成親しくしていたが、その後紅葉から居留守を使われるようになって交際が途絶えてしまった、と述べているが、断絶の原因の一つに、齒に衣着せず紅葉らを諷刺した『文學者となる法』の出版があったことは疑いないであろう。

以上、『文學者となる法』について見て来たが、この一篇が痛烈な文壇批判の書であることは野村氏の指摘のとおりである。が、仔細に見ると、紅葉をはじめとする硯友社一派に対する諷刺だけが、

彼らの文壇活動は勿論のこと、その私生活にまで及んでいることに気づくのである。魯庵は文芸批評に於て、紅葉に関してのみパロディという特殊な方法を用いたが、この『文學者となる法』でも、紅葉とその一派に対してのみ、私生活にまで言及するという他の作家に見られない特殊な諷刺の仕方をしてるのである。

この魯庵の諷刺態度は、表面的に見れば、紅葉とその一派に対する徹底した批判の顔われと受け取れるわけであるが、裏面から見れば、『文學者となる法』出版以前に於て、魯庵がいかに紅葉らと親しく交際していたかを知る好材料を提供しているともいえる。衣食住の好みや平生の癖まで把握できるほど深い交流があったという一証左であろう。と同時に、魯庵が『文學者となる法』に於ても紅葉を、他の作家達とは異なる近い存在として意識していたということをも示しているのである。

更に、注意すべきは、魯庵が実に巧みに戯文調の表現を操っているという点である。これほど紅葉と魯庵の共通性を感じさせる文章はないといつていいほどである。古典や外国作品を次々に引用しながら、諧謔、揶揄を含む文体で文壇を批判していく、その表現技術やセンスは紅葉の「紅子戯語」や「文盲手引草」に非常に近い。

また、この『文學者となる法』は三文字屋金平が四時間の間にしゃべったことを筆記したものと同一体裁を採っているが、『色懺悔』が一夜の物語であったと同様、近世によく見られた手法を用いているのである。表現とともに、これも留意すべき点であろう。

魯庵の子息、内田巖氏は、

父は（中略）當時の戯作的文學の排撃を試みたらしいが、『文學者となる法』など讀むと、實は父にも戯作者らしい風貌がある。

と述べている。<sup>注36</sup> いかにも魯庵は紅葉等の戯作的態度を常に批判していたが、近世の戯文の面白さを感じる点に於て、又、諷刺の利いた表現を駆使する素養に於て、非常に紅葉と似通ったものを持っていたと言えるのではなからうか。

このように、『文學者となる法』は、文壇批判の集大成というだけでなく、魯庵の紅葉に対する特別な意識のあり方、両者の交流の深さ、そして戯文的な表現をめぐる素養の共通性など、魯庵と紅葉との関係を探る、様々な示唆に富んでいるのである。

### 三

文芸批評、『文學者となる法』に於ける魯庵の紅葉に対する意識を論じて来たが、最後に回想集『思ひ出す人々』を取り上げてみたいと思う。

『思ひ出す人々』は『きのふけふ』を増訂したもので、紅葉に関する回想のタイトルも「硯友社のむかしの憶出」から「硯友社の勃興と道程」と改題されている。内容的にもかなり手が加えられているが、紙面の関係上、本稿では本文の異同については触れられない。<sup>注37</sup> 尚、ここでの引用は全て『思ひ出す人々』に拠ることにする。

ではまず硯友社についての記述から見ていこう。

最初に硯友社創立当時の事情についてであるが、魯庵は硯友社の運動が、「勃然無味なる政治小説や半熟未成の翻譯小説の跋扈するまゝに委してゐた」当時の文壇に反抗した、「化政度の新しいルネイサンス」だったと述べている。ただ、その調子が「如何にも輕くて浮はつて見えた」のは、「ユーゴーやデズレリーの翻譯小説」と比較されたせいでもあるが、「硯友社の藝術至上」が「時代遅れの化政度の戯作者生活をお手本にした」ためだと言つのである。ここで興味深いのは「硯友社の運動」を「ルネイサンス」「藝術至上」と捉えている点である。魯庵が「此時代の硯友社の作風や態度を佛蘭西や露西亞の近代作家に對するやうな心持で批評するのは時代を無視する色言である。」と述べているとおり、魯庵も明治20年代には「硯友社の運動」を「ルネイサンス」「藝術至上」として捉える視点は持ちあわせてなかつたように思う。いづれにしても、当時の文壇事情をふまえた冷静な分析と言えよう。

また、魯庵は、硯友社が「思ふ存分に」「戯作者風」の「氣分を發揮したため」一人批判されることになつたが、

此の何者にも制肘されない放縱な駄々子的氣分が當時の文學と記している。この「共鳴」をうけた「青年」の一人に魯庵が含まれていたことは疑いないだろう。

魯庵はこの回想中、硯友社が「團體の結束力」によって、文壇を支配した様子を度々記述している。例えば、「新作家を迎ふるに鋭意してゐた」文壇に、

多士濟々たる硯友社は勿ち章魚の足のやうに八方に勢力を伸ばし、新聞社に雜誌社に出版人に夫々多少の關係を附けざるは無かつた。其上に固く結束して互に相援引し、(中略)行動を侶にした。

というように述べているし、端的に、

硯友社の勢力は團體的の結束の力であつて各自の個々の内では無かつた。

とも述べている。出版界を牛耳つた様子も

讀賣新聞を牙城とした紅葉は(中略)三面及び文藝欄は思ふまゝに主宰した。春陽堂には前田曙山が座し、博文館には大橋乙羽が控へ、「新小説」も「文藝俱樂部」も硯友社の統轄に歸した。(以下略)

というふうに記載しているのである。

そして、その「統率」者であつた紅葉については、

紅葉の藝術的天分はエポックを書するだけの十分な力を持つてゐるが、夫よりも猶は一層勝れてゐたのは傘下の英才を統率して藝術的地盤を固めた政治的手腕であつた。

當時の硯友社は實に政友會であつて紅葉の手腕は原敬以上であつた。

と記し、傘下の人々の足並みを揃えさせた紅葉の「統率の才」を「尋常で無かつた」と認めているのである。魯庵は党派を組んで他を圧するやうなやり方に反感を抱いていたようであるが、これらの記述は当時の紅葉、硯友社の勢力をよく伝えていよう。

右は文壇における紅葉についてであるが、魯庵は個人的にはどう捉えていたのだろうか。回想中、美妙と比較した上で、その人柄について述べている箇所がある。それによると、美妙がいつまでたっても他人行儀であったのに対して

紅葉は初対面時から百年の友のやうに打解け、戯言も云へば氣焰も吐いて誰とも直ぐ肝膽を照らして語り合つた。

其實、紅葉は（中略）心から打解けるのでは無かつた。という。また魯庵は「思想上の扞格が感情上の乖離となつて」「交際が殆んど途絶え」ていたが、

紅葉と私とは都會育ちの共通の趣味や性格があつたので、思想上では相容れなくても紅葉に対しては丁度郷友に對するやうな親しみを持つてゐた。

と述べている。これを見ると、魯庵が紅葉に対して「都會育ちの共通の趣味や性格」があつたと認めていること、思想面と対人面とを別の次元で捉えていることがわかる。魯庵は続けて、「論壇では紅葉の態度や硯友社の作風に嫌らないで忌憚のない批評をしても、私交上には何の隔心も持たなかつた。」とも述べているのである。が、何といつても『思ひ出す人々』中、特筆すべき逸話は次に挙げる魯庵と紅葉の「最後の會見」であろう。

當時魯庵は丸善に在籍していたが、そこへ胃癌で余命三か月と宣告された紅葉が現われ、高価なセンチュリーを買って行くのである。この紅葉の態度に対して魯庵は、

自分の死期の迫つてゐるのを十分知りながら餘り豊かで無い財

から高價の辭典を買ふを少しも惜まなかつた紅葉の最後の逸事は、死の瞬間までも知識の慾求を決して忘れなかつた紅葉の器の大なるを證する事が出来る。と述べている。

柳田泉氏は、この「いかにも劇的」な逸話が「眞實の出来事か何うか」疑つたが、紅葉晩年の日記に、魯庵の記述はピタリとあう記事を見つけて、「魯庵氏のリテラリ・ポートレイトが、傳記資料としても相当以上正確なもの」であると知つたと記しているが、魯庵の回想が信憑性を持つものである一証左である。<sup>注38</sup>

魯庵は、この逸話を述べた後、次のように紅葉の回想を締め括つてゐる。

有體に云ふと、私は紅葉の著作には世間が騒ぐほどに感服してゐなかつた。其の生活や態度や人物にも嫌らなく思ふ事が多かつた。

紅葉の才能の非凡を惜んで「苦言を反覆」したために「心にもなく仲違ひ」するようになった。

が、瀕死の瀬戸際に臨んでも少しも挫けなかつた知識の向上慾の盛んなるには推服せざるを得なかつた。紅葉は眞に文豪の器であつて決して唯の才人では無かつた。

この『思ひ出す人々』は回想であるから、時間的隔たりによるイメージの変化や文章の誇張等、勿論考慮しなくてはならない。が、以上見て来たように、魯庵はかなり冷静な目を持って硯友社を見、また批判すべきところは批判して紅葉の性格を分析している。これ

は、魯庵の硯友社の把握が、今日の文学史上の位置づけときわめて近いことや、紅葉に関する記述が、後世の紅葉研究に大いに貢献したことをみてわかるとおりでである。死の間際にセンチューリーを購入した紅葉の態度は、魯庵の紅葉に対する印象をかなりよくしたと思われるが、ここには魯庵の本音に近いものが語られているといっているのではなからうか。思想、文学観、創作態度の上で両者が相容れなかったことは種々の文芸批評を見ても明らかであるし、魯庵が紅葉に対して「共通の趣味や性格」「郷友に對するやうな親しみ」を抱いていたことも、前述したパロディ評や「文學者となる法」に於て示した親近感や素養の共通性を考えあわせると頷けるのではなからうか。

『思ひ出す人々』に収められている作家の回想中、四迷と紅葉に関するものが、量的にも内容的にも光彩を放っているように思われるのは、二作家に対する魯庵の特別の思入れがその背景にあるからであらう。

### おわりに

魯庵は四迷に出会って、「人生と交渉する嚴肅な森嚴な意味を文學に認めるやうになつた」と語っている。<sup>注39</sup>つまり四迷は魯庵の文學観を一新させたのであったが、紅葉との出会いには、四迷が与えたような画期的な意義は見出せない。

しかし、紅葉は、魯庵の文筆活動に、四迷とは全く別の意義を与

えたとは言えはしまいか。紅葉という存在がなければ、魯庵はあのようにユニークなパロディ批評を残さなかったであらうし、私生活までも諷刺した明治の一大奇書『文學者となる法』も成立しなかったらう。江戸から明治への過渡期に東京に生まれ、どこか素養の共通点、共鳴を感じさせる紅葉という好対象を得て、はじめて、魯庵の本領である自由自在な分析力と諷刺力は発揮されたのではなからうか。

魯庵は紅葉に対して決して肯定的ではなかった。むしろ、その作品や創作態度について手厳しいほどに批判的であった。それを否定するつもりはない。が、魯庵にとって紅葉は、単なる批評、諷刺の対象ではなく、その根底には論理のエリアからはみ出た人間的な繋がりがあったように思える。紅葉に対してのみ特殊な方法を用いた文芸批評や、紅葉の私生活にまで踏みこんだ『文學者となる法』は、魯庵の紅葉に対する特別な意識を大いに反映しているし、『思ひ出す人々』中の回想にも、表面的には批判しても内面では常に親友だとする魯庵の二重の意識が度々顔を出しているのである。

魯庵の文筆活動を考える上で、紅葉という存在の特殊性・重要性を、今、再認識する必要があるのではなからうか。

### 注記

- 1 本稿は、昭和60年度高野山大学国語国文学会での口頭発表原稿を骨子に、大幅に加筆したものである。
- 2 本稿では煩雑さを避けるため、年月、号数等にはローマ数字を

- 用いた。
- 3 野村喬編「昭和59・1 ゆまに書房  
紅葉の作品を多く批評している点について、当時、批評に価するだけの作品が少なかったため、紅葉の作品を多く取り上げる結果になったのではないか、という捉え方もできる。が、質のいい作品だけを魯庵が選択して批評したのではないことは、鵜外の作品を一篇も取り上げていない一事をもってみてもわかる。紅葉作品を多く批評したのは、やはり関心があったからと捉えるべきであろう。」
- 5 「内田魯庵文芸批評の研究」——紅葉の作品に関する評を中心に——（「樟蔭国文学」17 昭和54・10）  
尚、魯庵の『色懺悔』評が紅葉の『夏木立』評のパロディであるということに関しては、右の論文中に詳述してある。本稿では重複を避けた。
- 6 本稿では批評方法のみに着眼したため「蝴蝶」評を特殊な批評の中に含めなかったが、この批評の文体は美妙の文体のパロディであり、魯庵の他の文芸批評とは趣を異にしている。（「文」）
- 7 署名不知庵主人（「國民新聞」明治23・3・13）  
署名藤の屋（「女學雜誌」158～159 明治22・4）
- 8 「社幹美妙齋著夏木立」署名紅葉山人（「我樂多文庫」7～9 明治21・9～10）但し、8～9号ではタイトルが「社幹美妙齋著夏木立の評判」となっている。
- 9 「新著百種第三號の評」署名藤の屋主人（「女學雜誌」111 明治22・7）
- 10 署名不知庵主人（「女學雜誌」137～138 明治21・11～12）
- 11 署名紅葉山人（「我樂多文庫」10 明治21・10）
- 12 署名ふ、ち（「女學雜誌」164 明治22・6）
- 13 署名藤の屋主人（「女學雜誌」161～162 明治22・5）
- 14 「座談会・近代日本文学史7 明治の社会文学」出席者 柳田泉 勝本清一郎 瀬沼茂樹 猪野謙二（司会）（「文学」27～8 昭和34・8）
- 15 署名内田魯庵 大正14・6 春秋社 内題は「おもひ出す人々」となっている。『きのふけふ』（大正5・3 博文館）の増訂である。
- 16 「文藝俱樂部」 明治37・10
- 17 「子が文學者となりし徑路」内田魯庵談（「新潮」11～6 明治42・12）
- 18 「紅葉と外国文学」岡保生（「尾崎紅葉の生涯と文学」昭和43・10 明治書院）
- 19 「尾崎紅葉」片岡良二（「片岡良一著作集」5 昭和54・12 中央公論社）  
「尾崎紅葉と外国文学」富田仁（「明治村通信」53 昭和49・10）
- 20 「知られざる逸話」石橋思案談（『明治文豪傳之内尾崎紅葉』明治40・9 文禄堂書店）
- 21 この事情については、「魯庵を追懐す」宮田修（「古本屋」昭和4・8）にも記されている。

- 22 「読書人の育った環境——内田魯庵伝ノート(一)——」(『青山学院女子短期大学紀要』昭和41・11)
- 23 魯庵の最初の文芸批評「山田美妙大人の小説」(明治21・10)にも既にディケンズ、サッカレー、ゾラの名が見えているが、明治20年代前半の文芸批評、評論を通じて、ディケンズ、サッカレー、アチソン、スウィフト、ゴールドスミス等の名は頻繁に登場する。また、スウィフトに関しては「スウィフト傳」(『女學雜誌』148 明治22・1)や「スウィフト論」(『女學雜誌』160 明治22・5)を、ディケンズに関しては「チャアレス、デッケンス傳」(『女學雜誌』173~178 明治22・7~9)を、ゴールドスミスに関しては「ゴールドスミスを評す」(『女學雜誌』179 明治22・9)を著しており、当時の魯庵の関心のありどころを示している。
- 24 「硯友社の発足」勝本清一郎(『国文学解釈と鑑賞』27-5 昭和37・4)後、「近代文学ノート3」(昭和55・6 みすず書房)所収。
- 25 「尾崎紅葉」勝本清一郎(『近代日本の文豪』1 昭和40・7 読売新聞社)後、「近代文学ノート3」所収。
- 26 注17参照。「南翠外史の『唐松操』」(署名南佛子「女學雜誌」172~173 明治22・7~8)中にも魯庵が「八大傳」に親しんだ頃のことを述べている。が、長じてからは「馬琴は小説大家の一人には相違なけれど唯一の者にてはあらじ」(『馬琴の小説』明治22・5)と、さほど評価していない。
- 27 署名不知庵主人(『小文學』1~2 明治22・11)
- 28 紅葉の父が角彫りの名人であると同時に「赤羽織の谷齋」という幫間であったことは周知のとおりであるが、魯庵の生母も元、吉原の芸妓であったこと、また、共に明治5年に母と死別し、母の愛情を知らずに育ったこと、紅葉が幫間である父の存在を隠し続けたのと同様に、魯庵も七人もの後妻を取り替えた父に対して嫌悪感を抱いていたことなど、両者の生育環境には共通する点が多い。
- 29 「紅葉山人の『南無阿彌陀佛』」署名南仙子(『女學雜誌』170 明治22・7)
- 30 「『此ぬし』に就つ」署名F.C.A.(『國民新聞』明治23・10・2~3)右文社。
- 31 「翻訳家時代と『文學者となる法』——内田魯庵伝ノート(四)——」(『青山学院女子短期大学紀要』昭和48・11)
- 32 「鎌倉及江の島」(『國民新聞』明治26・5・21、6・4)
- 33 「硯友社と紅葉」昭和2・4 改造社
- 34 江見水陰は「自己中心明治文壇史」(昭和2・10 博文館)の中で、「紅葉は全く不知庵を好かなかつた。足袋の底におまんまつぶを踏んつけた様な人間だと評してゐた。」と述べている。
- 35 「父魯庵を語る」(『書物展望』昭和8・3~9、11~12)後、「魯庵隨筆集」上巻(昭和16・2 改造文庫)所収。
- 36 『きのふけふ』から『思ひ出す人々』への改稿については、拙

